

【個人研究】

顔とコミュニケーション

— V. 顔の美しさ —

臺 利 夫*

Face and Communication V.

Beauty of Face

Toshio Utena

More pretty persons are preferred. It is apt to be thought that more beautiful women are more likely than less beautiful women to do good. People who are objects of our first impressions are not known to us. We have limited information about them. Whenever we meet new people, beauty of face is a key factor in our liking of other people. But beautiful women will be not necessarily be happy. In enduring relationships it seems to follow that we do not rank beauty of face as very important in our ranking of other people. We lower our sights somewhat so that there is a balancing with beauty of personality. Regardless of whether beauty of face was once the basis for love relationships, familiarity in married life produces greater liking than love at first sight. Though people's attitudes toward beauty of face are more or less associated with erotic desire pertaining to a sense of beauty, mere erotic desire as such does not clarify one's sense of beauty. It might aesthetically be said that beauty of face is created in the image of symmetry in nature. But human beauty transcends rational comprehension and is wrapped up in mysterious atmosphere. A Beautiful face, what first figures as a superficial trait, is imbued with substantial meaning.

1. 美しさだけを見る関係

初めて会う人の顔を“美しい”とか“素晴らしい”とか感じる状況は、まずもって見る

* うてな としお 文教大学人間科学部心理学専修

人と見られる人の間柄がごく浅い関係にある場合のことである。Reis et al. (1980) の調査では、社会的相互作用が時間を追って続く中で、身体的魅力の効果は薄れるという。第一印象では未知の人への情報が制限されているからである。最初の出会ひの関係の浅さは、見る側の人が美貌に魅されて引きづられ

ていると気づきにくいことであるが、美貌だけがとりあげられるのは、外側から相手の表情を見ていく状況なのである。

この状況を見られる側から捉えると、顔に魅力を感じさせる男性は関係の薄い女性との接触に励み、他方、美しい女性は自ら積極的に男性とつき合おうとせず、相手が近づくを待つということである (Reis et al. 1982)。だが、このように浅薄な関係があるとしても、そのことで美しさそのものが否定されるわけではないだろう。

顔の美しさと顔の魅力は等しくはないが分ちがたい。現代ではむしろ個性のある顔に魅力があるといわれているが、基本的な美感の有り無しは顔の評価にとって避けがたいことであろう。しかしこの基本的な美感なるものが必ずしも明瞭ではない。これについてはさらに後述する。

男性についてもハンサムな顔が目立たないわけではない。だが上記のような、相手を選ぶのは男であって女は男からはたらきかけを待つという構図は、男女平等をうたうアメリカをもってしても、社会がやはり男性優位であることを示している。そして男性社会では美貌といえば主に女性の顔についてのことになる。

しかし一層重要なのは顔を見る側が魅力を感じると否とを問わず、見られる側には見られたと意識した時に、それに応じて自分の顔形を修正できないことである。美しさを強調するようにポーズをとることもあるが顔の造作までは変えられない。容貌は遺伝的にかなりの程度決められている。顔の美しさは当人の習得努力や主体的参加の少ないところで相当程度できあがっていて、当人には十分な責任を負えない。つまり美しく見られても見られなくても、そのことの半ば以上は本人自身の人間的な価値を表すものではない。

美醜が問われる場の関係からも遺伝的規定性からも、本来、顔については過度に誇ったり過度に卑下したりすべきではない。だが今日では顔の美しい人がそうでない人より得を

することが多い。これは現代が「見かけ」だけで素早く動いている部分が大きく、ぎごちない格好をしてでもじっくりもの本質に迫るよりも、表面を掬うスピードとスマートさの方を重視しているところがあるからである。したがってなにはともあれ女性は美しい顔を見せなければ社会で仕事に着くことも結婚することも遅れをとるようにある。就職難の時代には美容整形をして就職のための面接試験に出かける人まで現れる。これは社会の浅はかさとして女性にとっての一つの受難を意味している。

女性の受難は昔から続いているといえるだろう。戦争で何時も辛い目に遭うのは女性と子どもである。銃弾で死んでいった男は、生き残って死ぬより苦しい体験を味わう女性たちよりはましなのかも知れない。平和な時代においても、気立ての良い娘が町の暴力団に性的な暴行を受けたり、無事に結婚しても自堕落な夫や無理解な姑によってさいなまれる女性がいる。母となればなつたで息子がぐれたり交通事故で植物人間になったり…小説家が昔から悲劇の題材にするのは何時も女性だった。

だが男より女の方が少なくとも表面的には分がよいと見られる場合もないとはいえない。従来から、社会心理学の研究は「美しい人はよい人である」というステレオタイプな見方が世の中にあることをいろいろと示していた。美人の写真とそうでない人の写真を見せて性格や適性について判断させると、前者は後者に比してより良いと判断される場合が多い。このことは社会全体の価値観に基づいている。

児童用の知能検査で顔の美醜を判断させて知能を測定するのは差別を肯定するものとして批判されているが、これを疑問なしに長年採用してきたことに社会全体にわたる特定の風潮を認めねばならない。子どもの教育の仕方においても、可愛くない子どもは可愛い子どもよりも厳しい躾けを受けやすいという。そして成人の社会では、若い美貌の女性はその美しさのゆえに世間からもて囃され、場合によっては芸能界にスカウトされ、宣伝上手なプロダクションや、興業士がとりつけば、

たちまちアイドルになって未成年にして巨万の富に恵まれる。平凡な顔の女性では化粧を工夫したり、懸命な努力をしてもとうてい及ばない。

美しい女性とはかく態度も自信ありげであり、他者を説得したり同調させたりする場合も有効だという。ただし特定の職種、たとえば婦人警官では美貌は二義的なものだろうし、美しさが不利にはたらくこともあるだろう。したがって「自分の性別に向けられる社会的期待に背かない限りは…美しいというだけで実際以上に肯定的に評価されていると言える」(山本 1993)。

今日の状況では事実として多くの点で美しい顔の持ち主が有利なのだが、美しければ必然的に幸せが約束されるわけではない。また顔に障害があっても、そのことへのこだわりを棄てて明るく逞しく生きる人も見出せる。要は美しい人もそうでない人もその人なりにどのように自分自身を素直に受け容れてゆけるかであろう。それがほとんど運命的に与えられたものに対する本人の側の主体的なはたらかかけである。

(2) 美しい顔がおとす陰

美しさの陽の当たる面だけに眼が向けられやすいが、ここではその背後の陰の面を顧みよう。顔の美しさだけをとり上げるのは表面的な見方ではあるが、そこに“美しさ”のもつ本質がまったく欠けていると言い切るのには妥当ではない。人が美を感じるのは、それが本来うつろいやすくてたちまち消えてゆくものだからでもある。四季の変化の中で美しい野山を美しいと感じるのも、それがやがて落葉して雪に覆われることが気づかれているからである。死期近い病人が日々、自然の美とくに心を打たれるのは、その人が間もなく朽ち果てることを当人が知っているからだ。やがて死ぬのは重体の患者や老人に限るわけではなく、すべての人間そしてすべての生きるものの定めである。人もまた生物であり自然の一部であれば、大都会の若い女性をターゲッ

トにした「人はビルの谷間の唯一の自然…」という化粧品会社の広告文も、見方によってはナンセンスとはいえない。はち切れるような肌に表れた今の若さの陰に生きるもののはかなさが介間見えるからこそ、今の間にその美しさをより際立たせたいのである。

人間の顔の美しさが山や海のみならず異なるのは、見る側が見られる側から美しさだけでなく人間特有なさまざまなサインを受けとることにある。美しさは不思議な魅力と分かっていることができない。女性の顔の美しさの魅力にはいくばくかのエロティシズムが混入したり、また僅かながら男性的要素が入っていることもある。顔の両側が同じでないことはよく知られているが、そうしたアンバランスなものによってある種の緊張が包まれているところにいうにいわれぬ魅力が生まれる。完璧に整えられた顔は(仮にそのような顔があればのことだが)必ずしも魅力的な美しさを感じさせないだろう。コンピュータで合成してつくったグラフィックのロボットの美貌は多数の美しい顔の平均でしかないから、個性もなくて見る側に感動も生じない。美人はそれぞれに違った特性をそなえているから魅力的なのである。だが美はバランスにあるかアンバランスにあるかの問題は断定できないところが多く、さらに繰り返したりあげるであろう。

美しい顔の魅力の大部分は当人の担うものであるが、見る側の特有の構えと見られる側にそなわったものの合作の面もある。時には見る側の見るはたらきが過剰な場合もある。恋に落ちた男が相手の女性の顔をこの上なく美しいと感じた時、その顔は第三者にとってはさほど美しいとは見えぬ相手の顔とイコールではない。恋する側の勝手な粉飾があり虚構がある。極端に言えば、自分が幻想した顔に自分で勝手に夢中になっていることが多い。だが恋愛ではそれが肯定されるだろう。

自然の山や川にさし向かう画家がキャンバス上に描いたものは自然そのものではなくて創作であり虚構である。画家の特徴的な印象が思い切った形で表現されている。絵を見る

多くの人がある美しさに感動したとする。目が肥えた人を見ると、その絵は実際の自然以上に自然の素晴らしさを表している作品だということがある。現地に行って当の山や川を見ても絵で与えられるほどの感銘は与えられないという話がある。つまるところ、絵の素晴らしさは画家と見る人の新たな合作なのである。ただし絵画とそれを見る者の間では絵の側から人へのあらわなはたらきかけは無い。恋愛の中の美しさは当事者相互の直接のやりとりによって深められるのである。

(3) 恋愛と結婚に見る顔

恋愛中の彼女または彼は間々自分をよく見せようとする。巧まずして真実を覆い隠すこともあるが嘘から真が出てくることもある。あえて自分にも相手にも真実を求めても、心情がゆれ動きつつ熟成の過程にある場合は、真実めいた言葉で表現すると事態が固定化してかえって嘘になる。ところが二人の間になんらかの困難が生じたりして、心と心が触れ合うことがあると自分の真の姿を発見し、相手の真の姿も見えてくる。これは共に成長する過程での真実であって、以前に当人たちが夢想していた真実ではない。

恋愛が結婚に進んだとして彼と彼女が体験するものもかつての想像とは異なるのがほとんどであろう。現実の日常生活は作業の積み重ねと客観的判断が要するという意味で芸術より科学に近い。だからと言って恋愛中に絶えず結婚後の生活実態での相手の姿を推測していたら、これはもはや恋愛ではないだろう。だが、あとの現実の生活がいくらかでもこうした美的・芸術的な体験を引き金にしているのは興味深いことである。別種の体験が時間的にもズレながら互いに欠くことができないているかのようである。

自らの意志でなく見合いをさせられた相手とか昔馴染を、ある日ふと恋人として再認識することもある。しかし相手の顔やまなざしがしばしば大きな役割を演じるのはとくに恋愛の引き金になる偶然の出会いの場合でうろ

う。一般的に言えば男性の側でまず女性を見染め、ジグザグがあってやがて女性もその男性を好きになることが多い。これは両者の生理的な差異にもよるし、既述のように社会のもつ価値観にもよるだろう。ともあれ女性の側で男性にとってより魅力的に見えるように顔を美しく化粧し姿態を整えるのが一般的である。自分自身の欲びのための化粧も否定できないとしても、なおそのようにいえるだろう。

男にとっても女にとっても異性に恋をするのは素晴らしい体験である。異性から見向きもされないというのは、同時に男としてまたは女として欠けているという意識が青年期には起こりやすい。とくに映画やテレビドラマが昼も夜も至る所で恋愛至上主義的な宣伝をするので、ますます異性の愛を求める欲求が刺激される。恋人同士は毎日でも会って顔を合わせないではいられない気持ちになる。いくらかでも時間的・空間的に離れると、会いたい顔を見たいの欲求が一段と高まる。出会った時には、街中でも電車の中でもピッタリと寄り添ってお互いの顔を見つめ合う。ふつう若い女性は異性の顔をまともに凝視することはないし凝視されることも嫌う。だが恋人に対しては眼を離さずにまるで男の眼の底まで覗きこむように見つづける。男は男で女の顔を手で触れたり撫でたりして、二人でじゃれ合うような光景が人前であけすけに行われる。いつも接触していないと不安に陥るのかもしれないし、周囲とは別の世界を二人でつくっているようでもあるが、また自分たちの関係を周囲に見せびらかしている風でもある。

このようなやりとりはいうまでもなく欧米流である。だがアメリカにおいてさえ1960年代頃までは所によっては、恋愛関係もかなり厳格な慣習に支配されていたようである。評論家の故小山内 宏の話では、ドイツ系の住民の居住地域でのことだというが、隣村の恋人を気ままに訪れることが許されず、村境で何十メートルも離れて、若い男女が何時間もじっと見つめ合っている風景が認められたと

いう。

恋愛は諸般の事情から片思いに終わる例も珍しくない。こうした場合にも顔は相思相愛の場合とは異なる意味ではあるが重要な影響を当人たちに与える。自分で自分の顔を貧弱だとか醜いとか思い込んで相手へ接近できないことがある。こうした劣等感には精神分析家にかっこの材料とされる、さまざまな屈折した行動をもたらす。典型的なのがE. ロスタン作の劇の剣士で巨大な鼻の主人公、シラノ・ド・ベルジュラックである。恋愛の当事者にとって顔への劣等感には多様な心理的圧力を与え、行動に歪みを与えることがある。

だが既に述べたように、恋愛から結婚へと進む場合には、相手の顔を単に美しいと見るのではなく、当事者間で互いになんらかの魅力を感じることが大切である。相手は自分を補償するような人物かあるいは興味や関心の一致する人物であるか、その双方であるか…によって魅力の度合いや質がカップルごとに異なるだろう。

昔、ある大学の心理学研究室で若い研究者たちが雑談した時のことである。妻選びをうたった明治の歌人と謝野鉄幹の、かの有名な「妻を娶らば才たけて、見目麗しく、情けあり…」についての話がでた。当時結婚したばかりの助手が、「与謝野鉄幹も酷なことを言ったものだ。頭が良いのと美人は両立しないし、美人で情け深い人も少ない。頭が良くて情け深いことも難しいから、これら三つのことは互いに逆相関であり、どれもが揃うことはありえないんだ」と述べていた。見合いの場合はこのような完璧を最初から求めないだろう。数多の条件を計っているのに、ゴールインしない場合にも、両者ともにおおむね大きな失望の体験は少ない。しかし見合いは見合いなりに、顔は他の条件とは別個しかし重要な判断の資料になる。まず写真が交換され、この写真交換の段階で見合いはストップになることも多いだろう。人為的に互いが傷つくのを最小限に押さえようとするのである。

恋愛で結婚したカップルで、一度短所が眼

につくと恋愛中に完璧と思っていた人ほど相手の小さな欠点を一層気にする場合があるとされる。また仮りにそのようなことがほとんど無い完全な人だとなると、こちら側で与えるものが無いような感じに襲われてしまうかもしれない。それはそれで重荷であり、ひがみや劣等感や時には嫉妬まで出てくる。あのように素晴らしい人なのに…と第三者が見ていても別居や離婚に至ることがある。つまり、相手の素晴らしい魅力は、生活での関わり合いの時間経過においてのみ確かめられるものだろう。このようにしてもなお受けとれる美しさは、かつてひと目惚れで動かされた美しさとは異質のものである。現実の中での相互の努力と協力によって創られたものが含まれているからである。

(4) 美しさとエロティシズム

世の中には衝動的に顔や姿態にひかれて、ひとかどの男(女)が性悪な女(男)に溺れこんで、生活上も抜き差しならなくなっている人が職業や年齢を問わずにいる。第三者はこのような人物に対して理の次元では批判しながら、情の次元では自分ではとても不可能な、この不条理をひそかに羨んでいることがある。こうした羨みの背後には、美しい顔を見た時、もっぱらその美しさだけに溺れてしまいたいという欲望がある。美しい顔が醸し出すなんともいえない魅力には、多少なりともエロティシズムがはたらいているのは疑えないだろう。むしろ美しさといくらかのエロティシズムは切り離せないというべきだろう。幾何学的に完璧と見えるような整っただけの顔が魅力を感じさせないのは、動物的な性的誘因が欠けているからなのである。エロティシズムは心の奥深く蠢くものであり、理屈では割り切れないなにかを孕んでいる。

顔は、それが位置づけられている身体と身振りや姿勢、姿勢を伴う態度とその場の人間関係、その関係がはたらいている社会的・文化的文脈とともにわれわれの前に立ち現れる。だが顔は全体状況の焦点的な意味をもってい

る。もし若い男性の身近に若く美しい女性が立っているなら、男性の視覚一杯に広がる女性から脂粉の香り、体臭、そしていわゆるフェロモンが撒き散らされて彼は性的に誘引される。むしろ女性が男性にひきづられることもある。これがコミュニケーションにおける有機的過程である。男女の隔たりがいくらあってもフェロモンは直接には届かないかも知れないが、顔を見ただけでひきつけられる。視覚が匂いをはじめとする諸々の身体刺激のイメージと結びつくことによるのだろう。しかも単に意識的なもののみでなく、無意識的なものも含めていろいろな刺激がイメージ化されるのだ。

視覚刺激がイメージをひき起こすという言い方はいくらかの注釈を必要とする。もともとイメージは、人や事物が現に目の前に無くとも、それが在った場合に喚び起こされるであろう感覚に似た体験と定義されている。だが外界の手がかりが全く無いところでのイメージとは異なり、部分的にいくらか現実的・具体的な事物が提示されていて、それを手がかりにイメージが形づくられることがある。たとえば椅子を一脚だけ用意し、そこに座っていると椅子を見ながら遠くの郷里に住む母親をイメージさせるのは容易である。しかもそのイメージは“椅子なし”のそれよりはるかに鮮明につくり出される。また病理的な例では、フェティシズムのように異性の手袋でさえ性的興奮をひき起こすことがある。こうした諸例をみるなら、日常生活場面で顔を見ただけで、その人の身体・態度・性格・行動のすべてを含んだ全体としてのその人をイメージするのは十分に可能といえる。

顔の美しさにひかれる際にはたらく性的エネルギー（いわゆるリビドー）は、遊びをはじめとして数多の生理的・身体的活動から社会的・文化的行動や科学の探求とさえ結びつくと精神分析学は説いている。スポーツや芸術活動でそのエネルギーが吐き出されるのはありうることだが、放火や盗みをするなどで性欲の満足を感じるケースは性の倒錯と解釈

されている。だが性欲はそれ自体としても一人歩きをする。本来は結果的に生殖作用が目指されるものなのに、しばしば性欲を満たすことそのものが目標になる。

性欲は顔の美しさと複雑に絡むが、性欲の露出や刺激が美しさをもたらす魅力に全面的にとって代わることはない。たとえばポルノ映画は過度に露骨な性描写をして見る人の想像力を窒息させる。想像体験の深い面を理解するためには性感と性愛に染み込んでいる神秘性が必要だが、それが壊されてしまうのである。あえて性感のような特別な感情を出そうとするとその結果、美しさは消えてしまう（May 1985）。つまり、人の顔については、その美しさにエロティシズムが入り込むようにエロティシズムの中に美しさが謎めいたものを染み込ませるのだが、単なる性描写にはそれが無いのである。

あらわに性感を刺激するものは社会行動や文化活動の世界からはとかく評判が良くない。若い少年少女が性体験に興味を持って深入りするともはや他の社会的・文化的活動への性欲を喪失するといわれている（Frank 1952）。だが性の解放と露骨な性欲の表出を混同するのも誤りである。Freudは汎性欲論（リビドーの理論）を持ち出した際、ビクトリア朝時代からの19世紀の厳しい道徳観のために（彼の敵または味方からのそれぞれの思惑によって誇張されているが）かなりの批判を受けた（鈴木 1992）。とくに児童期から性欲があるとした話は攻撃されたようである。だが性欲が人間にとって不可欠なものであって性の解放が人間の解放につながることを、性欲に代表される本能的な衝動と文化・社会的に顕現しうる自由な創造欲求が深い関連があることを指摘した点で、Freudは20世紀の新しい自由の旗手として名乗り出たのである。実際、ただ合理的・規則的に動かされるのではなく、個々の人が自由な発想をもって自由に行動することは、心の中からほとぼり出る衝動的なエネルギーなしには果せないことであろう。それは典型的には絵画やダンスなどの芸術に

見ることができるが、科学の世界での独創性にもこうした力が大いにあづかっている。

(5) 美貌の謎

顔の美しさがとりあげられるのはほとんど女性においてである。なぜ女性は男性以上に美しさを求められるのであろうか。人間における女性の美しさは本来自然にできあがるものではなく、特定の社会でのみ通用するようなものであって、社会的・文化的に学習されたものであるとの見方もある。だが、人間の場合には女性の美しさが本来的なものでないと言いつれない面がある。今日の生物学者は進化論の立場から学習説を疑問とするような、女性の美しさの条件をあらためて考察している。

たとえば、動物が配偶者を選ぶ際には遺伝的に類似するその子どもの適応度が少しでも高くなるような淘汰圧がかかるから、なるべく配偶者としては容姿の良いものを選ぶようになるのだ(蔵 1993)という。この場合、容姿の良い悪いは、それがどれだけ標準的であるかということと結びついている。つまり標準的なものは比較的適応度が高いということなのである。一般に、容貌の選択には標準的なものが好まれる場合と極端なものが好まれる場合があるが、多くの場合は有害の可能性の大きい極端に偏った形を避けて標準型を選ぶわけである。とくに女性の容貌が云々されるのは、男性ではまずもって生存上の社会的順位に関して淘汰を強く受けているからであり、この面での力量を必ずしも要しない女性に美しさがより多く求められるという。つまりは生存のために戦士たるべき男に対し、受け身で男を待つ女という構図が生物学的にも認められるということなのだろう。

ここで検討しなければならないことの一つは、標準的という場合に単なる平均ではなく全体としてバランスのとれた調和のあるものが美しいと見られている点である。調和と美は等しいとみられていることである。またその二つは、現在の社会では生存上の社会的順位は男性の実力と一般的な相関をもたない。

女性の社会への進出も目覚ましく、恋愛でも女性側でハンサムな男性を選ぶ場合も増えている状況なのだ。女性こそ美貌であるべしとの根拠は薄いという反論があるだろう。

まず後者の問題については次のような解説で応答される。「現在の人間の脳の中でのものを見るからくりは現代ではなく過去の時代に進化したものであり、現在の人間は原始時代以前の状況に適応している性質を相当ひきずっている。その結果、現在の人間が相手の実力を評価するときも、たとえ現在は意味が無くとも過去の進化したこれらの心のからくりが自動的にはたらき、その影響を受けるのである…」(蔵 前掲書)と。この考え方が肯定されるなら、大昔のなんらかの観念も現在の事柄の説明に活かされてよいことになる。Jungのような精神分析家の無意識についての神話的な解釈も思い起こされる。

また前者についての解説は、いろいろな外界のものの中になんらかの調和を見出だし、その調和の度合いを一つの手がかりとして外界の事柄を分けるのは有益だからだという。つまり外界の事柄の調和の度合いをはかる一つのインデックスとして美的感覚が進化したと考えるのである。しかしなにがどのようになれば調和があるといえるのだろうか。その基準をどこに求めるのだろうか。もともと外界におけるなんらかの秩序や規則の前提なしに、どうして調和を求めるようになれるのだろうか。ここまで考えると顔の美しさの根拠は人間も動物も自然も含めた世界において、美しいものをまさに美しいものとしているのはなにかという考えにまで進んでしまう。調和を求める心が美しい顔を求める根拠だとするなら、通俗的な美学史からなりともこの考えに近い考え方をもちこなければならぬだろう。

美学はギリシャの哲学者プラトンにおけるアイデアをまずとりあげている。アイデアとはさまざまな分野で美しいとされるものを見出だす、時空を超える唯一無二の美そのものである。それは次第にでき上がるのではなく

人の魂に突如として開かれるのである。ギリシャ後代の思想家はアイデアを精神に、霊にまで高めている。中世では美は神がもたらしたものであるということになる。やがてルネッサンスが始まると、自然にはロゴス（理法）のないものは何一つ存在せず、ある事物の各部の相互作用と調和（シンメトリー）が自然の基本原則とされるようになる。画家は自然を師とせねばならず、自然こそが神になる。だが自然のロゴスにしたがって人が見出す自然は自然そのものではないことに気づかれ、デカルト以降、人の自我のはたらきの強調へとつながってゆく。自然の調和が美しさにつながるのには、物と物の間でバランスがとれていると人の側で見るのが容易だからであり、美しさは調和であるから引きつけられるということである。

バランスがとれていることは美感をそその基礎的条件かもしれない。だが顔にアンバランスなところがあってはじめて美しさに魅力を感じるということも否めない。そうなるとなにが美貌を美貌にしているのかはいぜんとしてはっきりしない。美学の歴史を顧みると、かえって学問では処理できない面があらわになるようである。自然における調和から人間の顔における調和へと眼を向けてみても、あらためて調和とは一体なんなのかという疑問がいぜんとして残る。なにをもって調和があるというのだろうか。

たとえば鼻先と頤を結ぶ線（エステティック・ライン）より内側に唇がある横顔は美しく見えるのだが、この形態は線の外に唇が突き出している場合に比べて一層調和的であるとなぜ言えるのだろうか。調和なるものの絶対的な基準は必ずしも明瞭ではない。時代や民族や人種によって美貌の基準が異なるとなると、エステティック・ラインの重視は欧米の白人の容姿に合ったもののようにみえる。今日の日本人は食生活を初めとする多様な文化的変容によって容貌も西歐化して鼻が高く大きい青年男女も数多くいる。だが明治・大正時代に活動した日本人にも生物学者・生態

学者の南方熊楠のような風貌の人がいた。晩年の彼の顔はあたかもギリシャの哲学者のようだったと評されているが、デスマスクを見ても鼻は高く唇は締まって老いた欧米人のようである。このような顔は明治時代以前には良い顔、調和のとれた顔と評価されたかどうかは知らない。さらに昔の鬼や天狗は日本にまぎれ込んだ外国人ではなかったかとの話もあるから、かつては高く大きな鼻の顔が必ずしも好評を得ていたと言えないだろう。

美しさの原点は自然の秩序や調和にあり、人間も多分に自然の法則に従う生物であるから自然の美しさの解明に人間の美しさを重ね合わせて解釈するのは一応合理的に聞こえる。だがそれにもかかわらず、ある女性の顔を美しいと見ることには、自然の調和を明らかにするいかなる学問をもってしてもなお解明できない点がある。まずなによりも事実として、女性の持つ顔の美しさは人間の世界において人間にとって素晴らしいことである。美しさ解明の疑問を残して、むしろ一種の謎が顔の美しさをさらに深めているのではないだろうか。

参 考 文 献

- フランクル、V. E. 霜山徳爾（訳） 死と愛
みすず書房 1957 (Frankl. V.E.: Aertzliche
Seelsorge. Pub. Franz Deuticke, Wien,
1952)
- 蔵 琢也 美しさをめぐる進化論 勁草書房
1993
- メイ、R. 伊東 博（訳） 美は世界を救う 1985
誠信書房 1985 (May, R.: My Quest for
beauty. Saybrook Pub. Dallas, Texas,
1985)
- Reis, H.T. et al. : Physical attractiveness in
social interaction J. of Pers. & Soc.
Psychol., Vol. 38(4), 604-617, 1980.
- Reis, H. T. et al. : Physical attractiveness in
social interaction J. of Pers & Soc.
Psychol., Vol. 43 (5), 979-996, 1982.
- 鈴木 晶 フロイト以後 講談社 1992
- 山本真理子 「美しいこと」の対人的影響「資生
堂ビューティサイエンス研究所（編）化粧品心理
学 フラグランズジャーナル社」1993